鯉とベンチャー

「土曜寸言」030830

我が家の庭先には、雨上がりの水溜りのような池がある。中には二十年程前に入れた鯉が十数匹泳いでいる。無芸大食、大きいだけが取り柄で、餌代だけはばかにならない。

彼らは、初秋のこの季節になると、庭に上がってくる。自力で戻るものもあるのだろうが、戻れなくなったものもいる。幸い家人がいる時は、その暴れまわる大きな音や、匂いに集まってきた野良猫共の騒ぎに気が付いて、救出に行くかいが、留守のときなどには、不幸にして西方浄土に旅立つものもあるのだ。

何のために陸に上がってくるのか、彼らに尋ねたことも、なるのかもひょっとして分からないが、鯉達プを一段上がって、新たに陸上に生存空間を拡大しようと決意しているのかもしれない。

ところで、古生物学の教えるところによれば、四億年ほど前に、水中動物の一部が新天地を求めて陸上に移動し始めたという。当初は、両棲類であったが、やがて陸上の生活に適応するように、なって、水辺から完全に離れることができるようになるまでは、陸上移住を敢行した最初の一匹がいたはずだ。その彼女は何を考え、何を夢見て、そんな危険を冒したのであろう？そして、彼女は、我が家の鯉同様上陸に失敗し、命を失ったかもしれない。しかし彼らがいなければ、我等人類も今地球上にはいない道理なのである。

その人類はいま、地球表面と、二次元世界にあき足らず、三次元の宇宙空間に進出しようと考え始めている。そこは真空の世界だからよりも、酸素を使う肺呼吸に頼っていない。それにもかかわらず、成功はおぼつかない。

宇宙飛行士たちはこの危険に果敢に挑戦し、米航空宇宙局のスペースシャトルと旅客機を比較すると、その危険度は百万倍にもなるのである。

両棲類の情念は、四億年前の初期に、この国は空前絶後の出来事である。

今、こんな突き当たった社会は、成長の限界に来ている。

不況に見舞われている。

済経済環境から、この将来の無い経済成長の空間を創出する、冷静な計算に支えられた場所を定め、熱い情念によって、ジャンプしなければ、ならない。

ここへ、「ベンチャー」という言葉が、覚悟そのものを、創出する。

早朝の寝床で、池の鯉が、連想は、跳ねる音を聞きながら、途切れてしまった。